

地衣類は、菌類と藻類で構成された共生体である。適当な光と湿度を好み、安定した環境条件のもとでは多様な種が生育しているが、わずかな環境の違いが生育に影響するほど環境変化に敏感な種もあり、地衣類種の多様性は安定した環境の指標であるという見方もできる。地衣類の繁殖は、胞子のほか、粉芽、裂芽や地衣体断片といった無性的な散布体によっても行なわれる。これら散布体が母体から離れ、生育可能な条件の樹皮や岩上などに到達したものが若い地衣体を形成する。地衣類が生育できる着生基物は種によって決まることが多く、樹木や岩石などの種類や状態に対して強い特異性を示すものがある。このため、絶滅が危惧されている地衣類の多くは、そのような特異性が強く、わずかな環境条件の変化でも生育できなくなる種であることが多い。したがって、自然林の伐採や護岸工事などの土地開発・改良に加え、土砂崩れなどの自然災害も種の絶滅の要因となり得る。また、地衣類には藻類が共生しているため、その生育には光条件と湿度のバランスが重要である。県内の植生と地衣類との関係を見ると、低地域の社寺林ではスズジイを優占種とした森林がよく保全されている。山間部では、森林構成種としてウラジロガシやアカガシ等常緑広葉樹林が優占種となることが多いが、地衣類の生育する条件としては、やや光量不足で大型の地衣類相は貧弱である。その中でも出雲市に位置する鱒淵寺の社寺林は、適当な光と側を流れる小河川から供給される水蒸気によって湿度が絶えず保たれている。そのため地衣類相の豊富な森林となっている。その他、アカマツやクロマツを主とした出雲大社の社寺林では直径50cmを超える古木が多く、地衣類や蘚苔類も豊富である。しかし、このような里地の森林は、開発や大気汚染などの影響を受けやすく、森林環境の変化にともなって地衣類相も変化しつつある。また、地衣類が好む森林環境としてブナ林があるが、県内では飯南町や中国山地沿いに残存している程度で小規模であるのは残念である。県内で地衣類相の最も豊富な地域として隠岐諸島がある。本県での貴重な種のほとんどは大満寺山、鷲が峰など海拔300mを超える山中に生育するクロベ、ヒメコマツ、イタヤカエデ、カツラなどの樹皮に着生している。その他、五箇村の岳山、西ノ島町の焼火山神社の暖温帯常緑広葉樹林などは地衣類の豊富な環境であり、今後も保全すべき森林である。

島根県においては、地衣類相について現在まで十分に調査されていないが、比較的まとまった報告として、Kashiwadani (1985) が隠岐諸島の地衣類141種を報告している。この中で、コウヤハナゴケ *Cladonia koyaensis* が日本で和歌山県高野山に次ぐ第2番目の産地として報告され、また、国内では分布の南限となるカラフトカブトゴケ *Lobaria sachalinensis*、日本産として初めての報告となる *Phaeophyscia sciastra* や稀産種に属するナガサキトリハダゴケ *Pertusaria nagasakensis* も報告されている。このほか県内の地衣類を取り上げた報告としては、1900年代初頭のWainio (1918) などや、日本産地衣類のモノグラフの研究において検討された島根県産の標本として、モジゴケ科11種 (Nakanishi 1966)、トリハダゴケ科6種 (Oshio 1968)、ムカデゴケ科6種 (Kashiwadani 1975、1977a、b)、ヘリトリゴケ科3種 (Inoue 1981、1982、2000)、チャシブゴケ科1種 (Miyawaki 1988)、アナイボゴケ科1種 (Harada

1993)、チブサゴケ科3種 (Matsumoto 2000)、サルオガセ属3種 (Ohmura 2001) などがある。近年では、カラタチゴケ属 *Ramalina* の3種が Kashiwadani et al. (2023、2025) によって報告されている。これらの論文でリストされた種は今後、島根県の地衣類相の研究を行う上で貴重な資料となるであろう。

文献による報告種160種と、2001年から2003年にかけて中西稔と畑山経弘が島根県内で調査した結果、中西稔が標本として保存していたもの、さらにこのたびのレッドデータブック改訂に際して竹下俊治、柏谷博之、文光喜が行った現地調査によって新たに確認されたハクテンヒメキウメノキゴケ *Flavopunctelia flaventior* を加え、県内において確認された地衣類は67属193種となった。なお近年、DNAの塩基配列に基づく分子系統学的な解析により、多くの生物の分類体系が見直されている。地衣類を含む菌類も例外ではなく、今後詳細な研究が進むことで、地衣類相が修正される可能性があることを付記しておきたい。

今回の島根県のレッドデータブック改訂に当たり、地衣類の絶滅危惧種の選定を行った。環境省の絶滅危惧種に指定されているコウヤハナゴケの他に原生林など自然度の高森林の樹木の樹皮に着生し、大気汚染特に酸性雨等に弱いヨコワサルオガセ *Usnea diffracta* や、これまでの調査研究では国内に広く分布するとされていたものの、近年特に森林の荒廃や伐採が目立つアカマツやクロマツに着生し、個体数を極端に減少させているトゲサルオガセ *Usnea aciculifera* とコフレサルオガセ *Usnea bismolliuscula*、自然度の高い森林内ではしか生育できない地衣類で、県内では隠岐(島後)にのみ分布しているテリハヨロイゴケ *Sticta nylanderiana*、アツバヨロイゴケ *Sticta wrightii*、国内でもきわめてまれで限られた地点にしか生育していないトゲカラタチゴケ *Ramalina tumescens*、ハイイロカラタチゴケ *Ramalina cinereovirens*、フクレカラタチゴケ *Ramalina intestiniiformis* を絶滅危惧種に選定した。また、比較的自自然度の高い地域で見られるキンブチゴケ *Pseudocyphellaria aurata* は全国的にも減少傾向にあり、準絶滅危惧種とした。その他注目すべき種として、太平洋側には豊富であるが、日本海側では極端に少ないトゲシバリ *Cladia aggregata*、ドテハナゴケ *Cladonia caespiticia*、オリーブトリハダゴケ *Mordankia pertusaria obsorens* などがある。これら地衣類種の生育状況については今後注視していく必要がある。

各種解説の学名は原則として Ohmura & Kashiwadani (2018) に、高次分類群名については大村ほか (2025) によった。  
(中西 稔・竹下俊治)

#### 引用文献

- Harada, H. (1993) A taxonomic study on *Dermatocarpon* and its allied genera (Lichenes, Verrucariaceae) in Japan. *Natural History Research*, 2(2): 113-152.
- Inoue, M. (1981) A taxonomic study on the Japanese species of *Fiscidea* (Lichen). *Hikobia Supplement*, 1: 161-176.
- Inoue, M. (1983) Japanese species of *Huillia* (Lichenes) (2). *The Journal of Japanese Botany*, 58 (6): 161-173.

Inoue, M. (2000) Japanese species of *Lecidella* (Lichenes, Lecanoraceae) (II). Bulletin of the National Science Museum. Series B, Botany/National Science Museum, 26 (4): 139-153.

Kashiwadani, H. (1975) The genera *Physcia*, *Physconia*, and *Dirinaria* (lichens) of Japan. Ginkgoana: contributions to the flora of Asia and the Pacific region, 5: 1-77.

Kashiwadani, H. (1977a) On the Japanese species of the genus *Pyxine* (Lichen) (1). The Journal of Japanese Botany, 52(5): 137-144.

Kashiwadani, H. (1977b) On the Japanese species of the genus *Pyxine* (Lichen) (2). The Journal of Japanese Botany, 52(6):161-165.

Kashiwadani, H. (1985) Lichens of Dohgo Island, the Oki Islands. Memoirs of the National Science Museum, Tokyo, 18: 95-106.

Kashiwadani H., Moon K.H., Han J.E. and Takeshita S. (2023) Three new *Ramalina* species (Ramalinaceae) from Japan and Korea. The Journal of Japanese Botany, 98(6): 304-318.

Kashiwadani, H., Moon, K. H., Han, H. E. and Takeshita, S. (2025) Materials for the Distribution of Lichens in Japan (26) *Ramalina cinereovirens* and *R. intestiniformis* (Ramalinaceae, Mycomycota). The Journal of Japanese Botany, 100(1): 78-81.

Matsumoto, T. (2000) Taxonomic studies of the *Thelotrema* (Graphidales, lichenized Ascomycota) in Japan (1) Genus *Thelotrema*. The Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 88: 1-50.

Miyawaki, H. (1988) Studies on the *Lecanora subfusca* group in Japan. The Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 64: 271-326.

Nakanishi, M. (1966) Taxonomical studies on the family Graphidaceae of Japan. Journal of science of the Hiroshima University. Series B. Div. 2, Botany, 11: 51-126.

Ohmura, Y. (2001) Taxonomic study of the genus *Usnea* (lichenized Ascomycetes) in Japan and Taiwan. The Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 90: 1-95.

Ohmura, Y. and Kashiwadani, H. (2018) Checklist of Japanese Lichens. 128pp. National Science Museum, Tokyo.

大村嘉人・宮澤研人・田留健介・竹下俊治・宮脇博巳・吉田考造・柏谷博之 (2025) 日本産地衣類の高次分類群について (2) 地衣類および関連菌類の分類体系. ライケン, 23(3): 37-48.

Oshio, M. (1968) Taxonomical studies on the family Pertusariaceae of Japan. Journal of science of the Hiroshima University. Series B. Div. 2, Botany, 12: 81-163.

Wainio, A. (1918) Lichenes ab A. Yasuda in Japonia collecti. The Botanical Magazine Tokyo, 32:154-163.

## 地衣類掲載種一覧

計11種

### 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

- |             |                 |              |
|-------------|-----------------|--------------|
| ● コウヤハナゴケ   | ○ ハクテンヒメキウメノキゴケ | ○ ハイイロカラタチゴケ |
| ○ フフレカラタチゴケ | ○ トゲカラタチゴケ      | ● トゲサルオガセ    |
| ● ヨコワサルオガセ  | ● テリハヨロイゴケ      | ● アツバヨロイゴケ   |

計9種

### 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- コフレサルオガセ

計1種

### 準絶滅危惧 (NT)

- キンブチゴケ

計1種

### 【記号説明】

- : カテゴリー区分変更なしの種 (6種)
- ↑ : 上位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- ↓ : 下位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- : 新規掲載種 (5種)
- ◇ : 情報不足からの変更種 (0種)
- ◆ : 情報不足への変更種 (0種)

### 【掲載順の準拠文献等】

大村嘉人・宮澤研人・田留健介・竹下俊治・宮脇博巳・吉田考造・柏谷博之 (2025)

日本産地衣類の高次分類群について (2) 地衣類および関連菌類の分類体系. ライケン, 23(3): 37-48.

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チャシブゴケ目・ハナゴケ科

# コウヤハナゴケ

*Cladonia koyaensis* Asahina

### カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリ

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No Image

### 選定理由

県内では隠岐（島後）で確認されているのみであり、生育箇所が限られている。

### 概要

基本葉体は密生し、まれに粉芽をつける。子柄は短く、長さ1-5 mm。皮層はなく軟骨質、ウスニン酸、パルバチン酸を含む。和歌山県高野山と隠岐（島後）のみで確認されている日本固有の稀産種である。

### 参考文献

Kashiwadani, H. (1985) Lichens of Dogo island, the Oki Islands. Memoirs of the National Science Museum, 18: 95-106

### 県内での生育地域・生育環境

本種は日当たりの良いスギの巨木の根元付近に生育する樹枝状地衣である。本県では神社や寺社の境内にスギの巨木が見られるが、いずれも陰地である場合が多く、本種の生育に適した環境は少ないと推測される。

### 存続を脅かす原因

本種が生育している場所は参拝者や観光客が多く、境内の過度な維持管理作業による生育環境の変化が本種の存続を脅かす要因となり得る。

### 特記事項

2023年度の調査で本種は確認されなかったが、隠岐の他地域で本種の存続が期待されることから、詳細な調査が望まれる。

(執筆者：中西 稔・竹下 俊治)

地衣類

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チャシブゴケ目・ウメノキゴケ科

# ハクテンヒメキウメノキゴケ

*Flavopunctelia flaventior* (Stirt.) Hale

### カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリ

準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):竹下俊治



### 選定理由

本種は国内における稀産種であり、里山環境に生育することから人為的な影響を受けやすく、絶滅が懸念される。

### 概要

地衣体は葉状で、丸みを帯びた裂片をもつ、やや小型の地衣類。背面は黄色がかった灰緑色で、粉芽と偽盃点をもつ。おもな地衣成分としてレカノール酸とウスニン酸をもつ。樹幹や岩上に着生する。

### 参考文献

Moon, K. H., Ohmura, Y., Kashiwadani, H. and Yoshida, K. (2013) Materials for the Distribution of Lichens in Japan (20) *Flavopunctelia flaventior* and *F. soredica*. The Japanese Journal of Botany, 88(4): 258-260.

### 県内での生育地域・生育環境

隠岐（島前）の山において山頂付近の北斜面にある岩上で確認された。本県以外では低地から低山の樹幹に着生することが報告されている。

### 存続を脅かす原因

開発等による生育地の破壊、生育環境の変化が考えられる。

### 特記事項

本種は2023年度の調査において隠岐（島前）で確認された。国内ではこれまで北海道および長野県において報告されているのみである。

(執筆者：竹下 俊治)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チャシブゴケ目・カラタチゴケ科

# ハイロカラタチゴケ

*Ramalina cinereovirens* Kashiw., K.H.Moon & J.E.Han

### カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

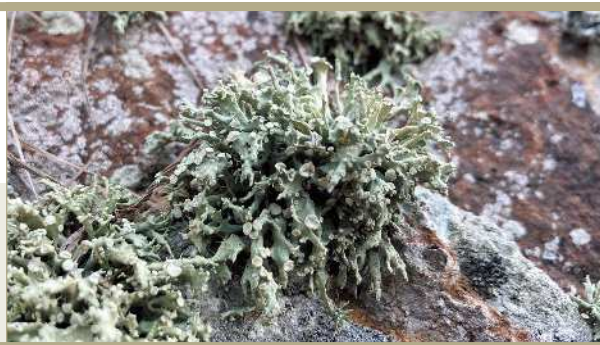
撮影者(提供者): 竹下俊治

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリ

-



### 選定理由

本種は海岸の岩壁に生育するが、本県においては隠岐(島前および島後)の限られた地点でのみ確認されている。いずれの生育地も歩道や車道に近いことから、人為的な影響を受けやすく、絶滅が危惧される。

### 概要

地衣体は樹枝状で枝は不規則に分枝する。枝は裏面に穿孔が散在し中空、分枝部はやや偏圧され、先端が尖る。枝の表面は淡い灰緑色、滑らかで粉芽や裂芽をもたない。直径3-4cmのコロニーを形成する。地衣成分はジバリカート酸がセッカ酸、サラチン酸(±)、ウスニン酸である。本県ではセッカ酸を含む化学変異種のみが見つまっている。本種の形態はトゲカラタチゴケに似るが、後者は枝に先細りの小枝を多数生じることや地衣成分の違いで本種と区別できる。

### 参考文献

Kashiwadani H., Moon K.H. and Han J. E. (2021) *Ramalina cinereovirens* and *R. subdecumbens* (Ramalinaceae, Ascomycotina), two new species from Korea. The Journal of Japanese Botany, 96(2): 74-83.  
Kashiwadani, H., Moon, K. H., Han, H. E. and Takeshita, S. (2025) Materials for the Distribution of Lichens in Japan (26) *Ramalina cinereovirens* and *R. intestiniformis* (Ramalinaceae, Mycomycota). The Journal of Japanese Botany, 100(1): 78-81.

(執筆者: 竹下 俊治・柏谷 博之)

### 県内での生育地域・生育環境

隠岐(島前および島後)の限られた地点における海岸の岩や低木の枝に着生する。

### 存続を脅かす原因

海岸の岩壁の崩壊や、護岸工事などによる自然海岸の消失に伴う生育地の破壊、過度な海水の暴露により生育が脅かされる。

### 特記事項

本種はKashiwadani et al. (2021) により韓国で記載され、これまで韓国以外で生育の報告はなかったが、2020年および2023年の調査により隠岐(島前および島後)で確認された(Kashiwadani et al. 2025)。2020年に生育が確認された地点の一部は、斜面の崩壊により2023年の調査では生育が確認できなかった。現在のところ本県が国内での唯一の生育地である。

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チャシブゴケ目・カラタチゴケ科

# フクレカラタチゴケ

*Ramalina intestiniformis* Kashiw. & K.H.Moon

### カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリ

-



### 選定理由

現在、県内で本種の生育が確認されているのは、隠岐(島後)の内陸部の山頂付近のわずかなコロニーのみである。

### 概要

本種の地衣体は樹枝状で、枝は不規則に膨らみ、穿孔があり中空、先端は尖る。直径3-5cmのコロニーを形成する。地衣体表面は灰緑色、滑らかで粉芽や裂芽をもたない。髄層の菌糸は連続する。地衣成分はウスニン酸、ジバリカート酸、サラチン酸(±)である。本種の形態は亜高山~高山に分布するタカネカラタチゴケに酷似するが、本種の髄層の菌糸は連続して皮層の内側に密着するのに対し、後者は不連続の塊となり皮層の内側はほとんど裸出することで区別できる。

### 県内での生育地域・生育環境

2023年の調査では、隠岐(島後)の内陸部の山頂付近の岩上にわず

### 参考文献

Kashiwadani, H., Moon, K.H., Han, J.E. and Takeshita, S. (2019) Materials for the distribution of lichens in Japan (23) *Ramalina intestiniformis* and *R. sphaerophora* (Ramalinaceae, Ascomycotina). The Journal of Japanese Botany, 94(6): 362-365.  
Kashiwadani, H., Moon, K. H., Han, H. E. and Takeshita, S. (2025) Materials for the Distribution of Lichens in Japan (26) *Ramalina cinereovirens* and *R. intestiniformis* (Ramalinaceae, Mycomycota). The Journal of Japanese Botany, 100(1): 78-81.  
Moon, K.H., Ahn, C., Han, J.E. and Kashiwadani, H. (2016) Two new species of *Ramalina* (Ramalinaceae, Ascomycota) from Korea. The Journal of Japanese Botany, 91 Supplement: 376-387.

(執筆者: 竹下 俊治・柏谷 博之)

### 存続を脅かす原因

現在確認されている生育地は山頂付近の切り立った岩壁のみであり、コロニー数もわずかであることから、極端な荒天によるコロニーの脱落や、岩の崩落による生育地の破壊が懸念される。

### 特記事項

本種はMoon et al. (2016) により韓国で記載され、国内では、現在までに対馬(Kashiwadani et al. 2019)と隠岐(島前および島後)(Kashiwadani et al. 2025)での報告のみである。本種の多くは海岸の岩上に生育するが、隠岐(島後)では内陸部の山頂付近で確認されており、生物地理学的に興味深い。

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チャシブゴケ目・カラタチゴケ科

# トゲカラタチゴケ

*Ramalina tumescens* Kashiw., K.H.Moon & J.E.Han

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 竹下俊治

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリー

-



### 選定理由

本種は海岸の岩上に生育する。県内においては、隠岐(島後)の限られた地点でのみ生育が確認されている。いずれの生育地も歩道や車道に近いことから、整備工事などの影響を受けやすく、絶滅が危惧される。

### 概要

地衣体は樹枝状で、基部から多くの枝が出る。枝は不規則に膨らみ、先端は尖る。枝の表面は灰緑色、滑らかで、小さな穿孔が散在し、長さ5-15mmの円柱状で先端の尖った小枝を多数生じる。髄層の菌糸は連続する。地衣成分はウスニン酸、エベルン酸、オプツザート酸である。本種の形態はハイロカラタチゴケに似るが、本種は枝に先細りの小枝を多数生じることや地衣成分の違いで区別できる。

### 参考文献

Kashiwadani H., Moon K.H., Han J.E. and Takeshita S. (2023) Three new *Ramalina* species (Ramalinaceae) from Japan and Korea. The Journal of Japanese Botany, 98(6): 304-318.

### 県内での生育地域・生育環境

海岸の岩壁に生育する。県内では、隠岐(島後)のみで確認されている。

### 存続を脅かす原因

海岸の岩壁の崩壊や、護岸工事などによる自然海岸の消失に伴う生育地の破壊、過度な海水の暴露により生育が脅かされる。

### 特記事項

本種はKashiwadani et al. (2023) により記載され、隠岐(島後)がタイプ産地である。国内では、伊豆の石廊崎からも採取されている。(執筆者: 竹下 俊治・柏谷 博之)

地衣類

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チャシブゴケ目・ウメノキゴケ科

# トゲサルオガセ

*Usnea aciculifera* Vein.

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリー

-

No Image

### 選定理由

本種は比較的 lowland 域に生育するアカマツやクロマツの樹幹に着生するが、最近の本県における調査では確認されていない。本種は国内各地でもその存在を確認することが困難になってきており、絶滅が危惧されている。

### 概要

本種は糸状の樹枝状地衣で、長さ20cmに達し樹幹より垂れ下がる。地衣体は淡黄緑色で、ほぼ二分岐をする。ソラリアはない。地衣体の基部は連続するか不規則な割れ目をもつ。国内では東北地方以南に分布し、国外では台湾、中国、ネパールにも分布する。

### 参考文献

Ohmura, Y. (2001) Taxonomic study of the genus *Usnea* (lichenized Ascomycetes) in Japan and Taiwan. The Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 90:1-96.

### 県内での生育地域・生育環境

比較的 lowland 域のアカマツやクロマツの樹幹に着生するが、県内では、県東部および中部の二カ所からの報告があるのみであり、近年の調査では確認されていない。

### 存続を脅かす原因

大気汚染や気候変動の影響によるアカマツ林やクロマツ林の荒廃、伐採などで生育環境が失われることが危惧される。

### 特記事項

2023年度および2024年度の調査においても本種は確認されなかった。しかし、県内には比較的良好的なアカマツ林やクロマツ林が維持されている地域も散見されることから、詳細に調査することで生育の可能性があると推察される。詳細な調査が望まれる。

(執筆者: 中西 稔・竹下 俊治)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チャシブゴケ目・ウメノキゴケ科

# ヨコワサルオガセ

*Usnea diffracta* Vain.

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No Image

### 選定理由

県内では1959年に採集された標本から隠岐（島後）での生育が確認されているが、生育環境の悪化による絶滅が危惧される。

### 概要

本種は樹幹から垂れ下って生育する糸状の樹枝状地衣で、大型のものでは長さ70cmに達するものもある。地衣体表面に多数の輪状の裂溝を生じて区画されることで、他のサルオガセ属地衣類と区別できる。一般に中国地方ではブナ帯域に生育する。

### 県内での生育地域・生育環境

本種は海風の強い島嶼部には生育しないとされているが、本県では隠岐（島後）の標高340mの地点で採集されており、島嶼部であることに加え、比較的低い地域での生育は、植物地理学上貴重である。本種は国内では北海道から九州までの自然度の高い主として冷温帯～亜寒帯の森林から報告されている。国外ではロシア、台湾、中国からの報告もある。

### 参考文献

Ohmura, Y. (2001) Taxonomic study of the genus *Usnea* (lichenized Ascomycetes) in Japan and Taiwan. The Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 90: 1-95.

### 存続を脅かす原因

大気汚染や樹木の伐採などによる環境の変化や自然林の荒廃の影響が考えられる。

### 特記事項

2002年度および2023年度・2024年度の調査では本種の生育を確認できなかった。しかし隠岐の島町内の山体では比較的良好な森林環境が維持されており、本種の生育が十分に期待できる。また、中国山地沿いのブナ林等でも生育が確認される可能性がある。今後の詳細な調査が望まれる。

(執筆者：中西 稔・竹下 俊治)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ツメゴケ目・カプトゴケ科

# テリハヨロイゴケ

*Sticta nylanderiana* Zahlbr

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリー

—

No Image

### 選定理由

かつては各地のブナの樹幹に着生していたが、近年の自然林の急速な荒廃により個体数が減少し、本種の生育を確認することが困難になっている。本県でも例外ではない。生育環境の悪化による絶滅が危惧される。

### 概要

地衣体は葉状で着生基物に密着する。地衣体の各裂片は4—12mmで、類似種のアツバヨロイゴケより薄い。背面は淡黄緑色～灰緑色、滑らかで光沢をもつ。腹面は暗褐色～淡褐色で、直径0.3—1mmの盃点を散在する。子器は円形、子器盤は茶褐色である。各地のブナ等落葉広葉樹やオオシラビンなど針葉樹の樹幹に着生する。中国やアフリカにも分布する。

### 県内での生育地域・生育環境

隠岐（島後）から報告されているのみである。中国山地沿いのブナ林等で生育が確認される可能性があるが、自然林の荒廃等で絶滅が危惧される。

### 存続を脅かす原因

自然林、特にブナ林の伐採や荒廃などによる自然破壊が本種の存続に及ぼす影響は大きい。

### 特記事項

2023年度の調査では本種の生育を確認できなかった。しかし大満寺山をはじめとした隠岐の島町内の山体は比較的良好な森林環境が維持されており、本種の生育が十分に期待できることから、詳細な調査が望まれる。

(執筆者：中西 稔・竹下 俊治)

### 参考文献

Kashiwadani, H. (1985) Lichens of Dogo Island, the Oki Islands. Memoirs of the National Science Museum, 18: 95-106.

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ツメゴケ目・カブトゴケ科

# アツバヨロイゴケ

*Sticta wrightii* Tuck.

### カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリ

—

No Image

### 選定理由

県内では隠岐（島後）からのみ報告されている稀産種である。近年の自然林の荒廃による生育環境の悪化が懸念される。

### 概要

地衣体の形態はテリハヨロイゴケに類似するが、地衣体がテリハヨロイゴケよりやや厚く、背面に光沢がないことで区別できる。腹面は暗褐色～淡褐色で、盃点を散在する。子器は円形、子器盤は茶褐色である。本種は北海道、本州、四国に分布するほか、ロシア、ヨーロッパ、台湾、中国にも分布する。

### 参考文献

Kashiwadani, H. (1985) Lichens of Dogo Island, the Oki Islands. Memoirs of the National Science Museum, 18: 95-106.

### 県内での生育地域・生育環境

県内では隠岐（島後）でのみ確認されているが、テリハヨロイゴケ同様、中国山地のブナ林での生育が確認される可能性がある。

### 存続を脅かす原因

自然林、特にブナ林の伐採や荒廃などによる自然破壊が本種の存続に及ぼす影響は大きい。

### 特記事項

2023年度の調査では本種の生育を確認できなかった。しかし大満寺山をはじめとした隠岐の島町内の山体は比較的良好な森林環境が維持されており、本種の生育が十分に期待できることから、詳細な調査が望まれる。

(執筆者：中西 稔・竹下 俊治)

地衣類

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チャシブゴケ目・ウメノキゴケ科

# コフクレサルオガセ

*Usnea bismolliuscula* Zahlbr.

### カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリ

—

No Image

### 選定理由

県内で本種が確認されているのは二カ所のみである。アカマツ林やクロマツ林の荒廃による生育環境の悪化により、絶滅が危惧される。

### 概要

本種は長さ約15cmの糸状の樹枝状地衣で、スギやアカマツ、クロマツの樹幹より垂れ下がる。地衣体主軸に小さな穴があり、ソラリアは点状で、その基部はくびれる。近縁種のトゲサルオガセとは主軸の小さな穴とソラリアを持つことで区別できる。本種は国内では東北地方以南の標高150～1,000mに分布する。国外では台湾、中国、インド、オーストラリアに分布する。

### 参考文献

Ohmura, Y. (2001) Taxonomic study of the genus *Usnea* (lichenized Ascomycetes) in Japan and Taiwan. The Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 90:1-96.

### 県内での生育地域・生育環境

クロマツやスギの樹幹に着生しているが、稀産である。

### 存続を脅かす原因

大気汚染や気候変動の影響による森林の荒廃、伐採などで生育環境が失われることが危惧される。

### 特記事項

2023年度および2024年度の調査において本種は確認されなかった。比較的良好な環境が維持されているアカマツ林やクロマツ林、スギ林を詳細に調査することで生育を確認できる可能性がある。

(執筆者：中西 稔・竹下 俊治)

絶滅  
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

## 準絶滅危惧 (NT)

ツメゴケ目・カブトゴケ科

# キンブチゴケ

*Pseudocyphellaria aurata* (Ach.) Vain.

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 竹下俊治

### 島根県固有評価

隔離分布種

### 環境省カテゴリー

—



### 選定理由

県内では隠岐（島後）で確認されているのみであり、生育箇所が限られている。里山環境の荒廃にともない、近年、全国的に減少傾向にある。

### 概要

低地の比較的湿潤で明るい森林の樹皮に着生する葉状の大型地衣類。地衣体背面は乾いているときは灰緑色、濡れているときは濃緑色。腹面は褐色で偽歪点をもつ。裂片の縁に沿って生じる黄色の粉芽が黄金色に見えることが和名の由来となっている。

### 参考文献

Kashiwadani, H. (1985) Lichens of Dogo island, the Oki Islands. Memoirs of the National Science Museum, 18: 95-106.

### 県内での生育地域・生育環境

本種はKashiwadani (1985) により隠岐（島後）で報告され、2023年度の調査でも隠岐（島後）で生育が確認されている。県内の他地域でも同様の環境に生育している可能性があるが、2024年度の県中部および南西部の調査では確認されなかった。

### 存続を脅かす原因

本種は低地の樹木の樹幹に着生することから伐採など人為的な影響を受けやすく、また、生育地近辺の開発による乾燥化など生育環境の変化が本種の存続を脅かす要因となり得る。

(執筆者: 竹下 俊治)